

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1270
施設名	ブライト保育園調布仙川
施設所在地	調布市仙川町3-17-6
法人名	社会福祉法人済聖会

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

からだ

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

子どもは最初に自分の「手」の存在に気づき、舐める、つかむ、投げる、這う、歩く、走るというような発達をたどり、自分の「からだ」を無意識に使いながら生活の中でさまざまな不思議と出会い成長していく。そんな子どもの日々の生活の中に豊かな環境を作り、保育者が働きかけをしていくことで更にその好奇心が広がり、子どもが全身を使い自由に表現するきっかけにしたいと思いこのテーマを設定した。

## 2. 活動スケジュール

【1歳児】8月～11月 テーマ①「感触遊び」ホームページ掲載  
12月～1月テーマ②「手足を使って遊ぼう」  
【4歳児】9月～11月 テーマ②「泥団子作り」ホームページ掲載  
12月～1月テーマ②「全身を使って遊ぼう」

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

【1歳児】(素材)水、絵の具、氷、小麦粉、寒天、きな粉、高野豆腐、おから、片栗粉、しらたき、パン粉、ふえるワカメ、シンキング

(環境)子どもが自由に選択できる環境。素材、容器など豊富に用意し、設定時間を過ぎても子どもたちが遊びこんでいる時は、時間を伸ばしたりするなど柔軟な対応をしながら子どもたちの探究を妨げないような環境を設定した。

【4歳児】(素材)砂、園芸の土、黒土、シンキング

(環境)子ども自身が気づき疑問を持てるような環境を整え、子どもが選択できるような豊かな環境を設定した。

## 4. 探究活動の実践

### <活動の内容>

【1歳児】まずは身近な水を自由に触ってみることから始め、絵の具のぬたくりで手指を使ってみる。次に小麦粉、氷、寒天など素材を少しずつ増やしていき、最終的には小麦粉、寒天、きな粉、高野豆腐、おから、しらたき、パン粉、ふえるワカメなど目の前の様々な素材を子ども自身が選び取れるようにした。子どもはそれらをつついたり、押ししたり、つまんだり、ぎゅっと握ったり、合わせたりしながら、その感触の違いやそれぞれが混ざり合う不思議、気持ちよさを体感していった。それは手足の感触を思い切り体感した子どもたちが、自由に手足を使う運動遊びへのきっかけとなった。

【4歳児】「崩れない泥団子ってどうやって作るの？」という子どもの疑問から探究活動が始まった。子ども同士で話しながら作り方を工夫していく中、保育士が整えた環境の下、砂？プランターの土？黒土？と子どもなりに探究し手指の使い方も巧みになり、崩れない泥団子が作れるようになった。泥団子作りに自信を持った子どもたちは、おやつ時間に「自分のおにぎりを作りたい」と言い、その活動が食育活動へと広がりをみせた。子どもの探究心が食育活動にも広がり、更には手足を意識しながら使い、シンキングを登ったり、渡ったり、くぐったりしての全身を使った活動へと発展していった。

### <活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

【1歳児】最初は手で触るのを嫌がった子どももいたが、クラスの友だちが触っているのを見て安心したのか、皆が次第に参加するようになっていった。「わ〜」「つめたい」「べたべたする」「よいしょ、よいしょ」「気持ちいい」「ザラザラ」「びちょびちょ」などと感じるままを言葉にしなが様々な素材の感触の違いや気持ちよさを味わい、興味を深めていった。

【4歳児】砂場の砂でお団子を作っていた子どもが、きれいな丸にしようとするが「すぐにこわれちゃう」「サラサラしてるからじゃない?」「砂が柔らかいからだよ」「他に砂ないの?」「畑か泥遊びの土(黒土)しかないよ」「先生、畑の土使ってるいい?」「(保育士)どれでも使ってるいいよ」「(雨上がりの日に)これベチャベチャしてる」「これ、こわれなよ」「黒い土ならこわれなよ」「こっちはちっちゃい石が入ってるからやだな」「ぼく、三角になった!」「おにぎりみたい」「ほんとだ、すごいね。どうやって作った?」「こうだよ」と子ども同士教え合う。保育士が「丸いおにぎりも三角のおにぎりもあるよね」と言うと「おやつのおにぎり作りたい」「大人じゃないとできないよ」「先生、できると思う?」「(保育士)みんなはどう思う?」「難しいと思う」「わたしできそう」「ぼくもできる」「(保育士)じゃあ、今度のおやつの時作ってみたいって、給食の先生に伝えてみよう」「やったー!」と、おやつのおにぎり作りに発展した。



## 5. 振り返り

### <振り返りによって得た先生の気づき>

・1歳児クラスは子どものつぶやきはあるものの、子ども同士が話しながら協力したり考えを広げる場面は少ない。しかし目の前の子どもの姿を見ながら保育者同士が対話を重ね「次はこんな環境を用意してみよう」、「子どものここを大事にしよう」など段階を追って環境を考え整えていくことで、子どもの好奇心が広がり、更にやってみたい思いに繋がっていった。

・4歳児は、子どもの「何で?」「どうして?」を拾った保育者が豊かな環境を構成し動きかけることで、その好奇心が予想以上に大きな広がりを見せた。「問いを考え環境をデザインし、探究活動をして振り返りまた問いを考える」この一連の流れの中に子どもの気づき、保育士の気づきが生まれ、更に探究活動が深まっていった。また、写真など記録することで用意した環境への関わりが客観的に見え、それが次への環境構成(探究活動)へと発展し、更に活動を公開することで保護者と保育者とが子どもの育ちを共有し互いが繋がり、子ども同士も学び合い保育者同士も学び合う互恵性を生んだ。